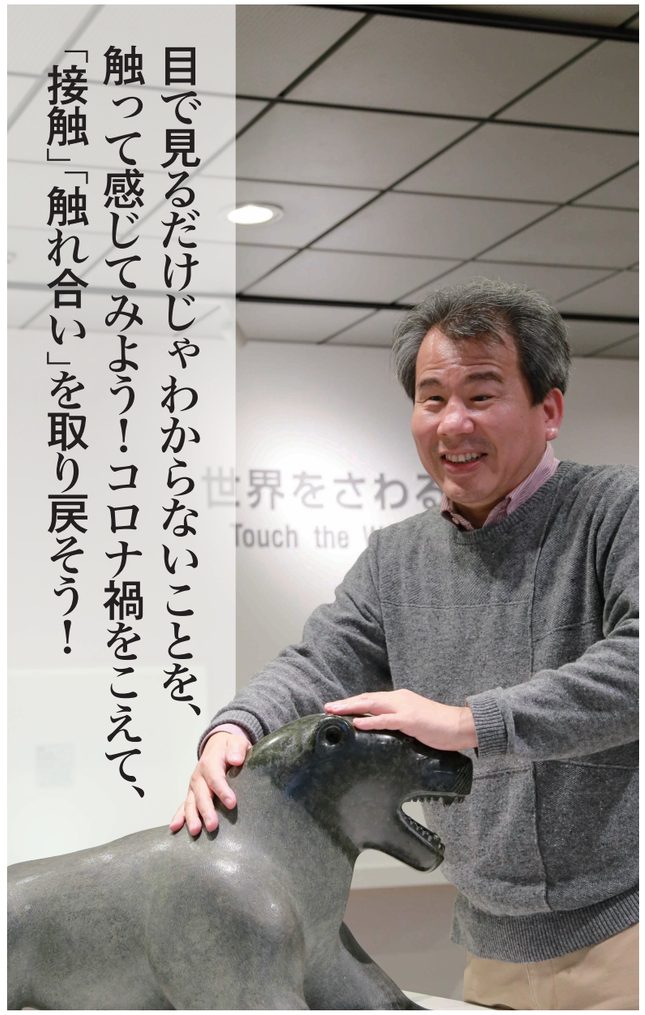
教えてセンセイ

広瀬浩二郎先生に聞く〈触る文化、触文化の話〉

# 目で見るだけじゃわからないことを、触って感じてみよう！コロナ禍をこえて、「接触」「触れ合い」を取り戻そう！





## 広瀬浩二郎さん

（ひろせこうじろう）

国立民族学博物館 グローバル現象研究部 准教授。専門は文化人類学、触文化論。1967年、東京都生まれ。13歳のときに失明し、筑波大学附属盲学校を経て、京都大学文学部卒。同大学院で文学博士号取得。2001年から国立民族学博物館勤務。『ユニバーサル・ミュージアム』（だれもが楽しめる博物館）の実践的研究に取り組む。2021年には、民博で特別展「ユニバーサル・ミュージアムーさわる！ "触"の大博覧会」を実行委員長として開催。著書に、『触常者として生きる』（伏流社）、『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！』（小さ子社）など多数。


## 視覚偏重の現代。「触覚」の潜在力に気づいてほしい

「触る」「接触する」ことがコロナ禍では敬遠され、「触らない」「非接触」が強調されるようになりました。僕は、13歳のときに目が見えなくなり、視覚障害者として生きてきました。僕の日常生活は、点字の本に触る、公共交通機関で駅員さんの肘に手をおいて誘導してもらうなど、物や人に触れることで成り立っています。もちろん感染予防は大事ですが、「触ってはいけない」「非接触」へと全体が流れていく風潮には不気味さを感じ、自分の存在が全否定されるような危うさも感じました。

同時に、このまま人や物との接触をなくしてしまって、人間は本当にいいのだろうかと。そもそも人間の歴史を考えてみれば、人と人の密接な関係から新たな絆が生まれ、人が密集することで新しい文化を生んできました。人間にとって触れ合いや接触が欠かせないということを、自分の立場として社会に発信していかなければと思いました。

僕は、勤務する国立民族学博物館で2006年に「さわる文字、さわる世界～触文化が創りだすユニバーサル・ミュージアム」という展覧会を開催して以来、「触る文化」「触文化」を提唱しています。もともと「見学」する施設である博物館は、視覚障害者にとって縁遠い存在だったんです。そこで、博物館に「触って鑑賞する」という要素を加えれば、視覚障害者も楽しめるようになるだろうと、当初、展覧会を企画するにあたって考えたわけです。

加えて、目が見えている人にとって「触る」とはどんな意味があるのだろうかと考えました。現代は視覚優位、視覚偏重の時代と言われます。視覚は非常に便利です。人間の五感のなかで、「より多く、より速く」情報を入手・伝達できるのが視覚です。テレビ、パソコン、スマホもしかり。そうして視覚に頼り過ぎた結果、いつの間にか、触覚をはじめとした他の感覚を使うことがおろそかになってしまっている。むしろ目が見える人にこそ、「触る」という感覚を取り戻してほしい。「触る」ことの大切さに気づく場としての博物館、展覧会をめざそうと考えるようになりました。

人間の五感のうち、視覚は目、嗅覚は鼻、味覚は口、聴覚は耳というふうに感覚器が限定されています。しかも、感覚器はすべて顔に集中しています。それに対して、触覚は一般的には手で触ることをイメージしますが、実際には全身に分布しているわけです。イスに座れば、おしりや背中でイスの感触を感じ、足裏では床を感じます。顔や体に当たる風も感じるでしょう。全身の毛穴から手が伸びて、外界の情報を把握するのが触覚です。

実は、視覚優位の時代になったのは明治時代以降のこと。たとえば江戸時代以前の夜は、街灯もなく真っ暗です。視覚は役に立ちませんから、だれもが夜になると、足裏の感覚を頼りに周囲の音に耳をすまし、全身の感覚を研ぎ澄まして歩いていたんです。また、写真もDVDもない中世、琵琶法師が絵巻物などの視覚メディアではなく音と声で語ったのは当然として、物語を聴いていた者の大半は目が見えている人たちです。彼らは、音と声を通じて何十年、何百年も前の源平合戦の様子を豊かな想像力で膨らませ、頭の中に映像を思い描いていたんです。視覚優位の現在は、こうした聴覚情報を視覚情報に変換する想像力、感性がしぼんでしまったようにも思います。

全身の感覚を使って歩くというのは、見えなくなって約40年の僕にとっては当たり前になっていました。ところがコロナ禍でマスクを付けるようになったある日、通い慣れた通勤路である万博公園内で迷子になったんです。たかが布1枚で、顔に当たる太陽や風の方向、草木の匂いなどが塞がれたためです。「顔の感覚からいろいろな情報を得て、歩いていたんだな」と触覚や嗅覚など、視覚以外の感覚の潜在力を再認識するきっかけになりました。

## 「触る鑑賞」で、目で見てわからないことが見えてくる

目が見えなくなったことは、読む、歩くなど、それまで普通にやっていた「できる」から「できない」への転落でした。そんななか13歳の僕が挑戦したのが、点字の触読です。「こんなのわかるわけない」と思いながら練習を繰り返すうち、あるとき「わかる！読めた！」という感動が指先から全身を駆け巡ったんです。「できない」が「できる」に逆転した瞬間でした。同時にそれは、眠っていた僕の触覚が目覚めた瞬間でもありました。

物を触ると、つるつるしている、ざらざらしている、柔らかい、冷たいなど、単純に触らないとわからないことがわかりますよね。さらには、じっくり触ることで、こうやって作ったのかなと作り手の追体験をしたり、物を使った人の存在を感じたり、物の背後にある文化を想像したり。そんな目には見えない何かを、手の触感を通じて感じ取れる瞬間があります。その瞬間を僕は「触覚の衝撃」と名付けています。それまで閉じていた触覚が開く瞬間です。民博には「世界をさわる」というコーナーがあります。そこで民俗資料に触って、目で見るだけではわからない何かを触覚で感じてほしいと思います。

また近年、広めようとしているのが「無視覚流鑑賞」です。博物館でアイマスクをする、もしくはブラックボックスの中に手を入れるなど、視覚を塞いで鑑賞してもらうのです。目は便利ですから、目が見える人は触る前に物が見えてしまいます。それでは触ったとき「ああ、こういう形だよね」と「確認型の情報収集」になってしまいます。ちょっと乱暴だけど視覚を塞いで触覚に集中してもらうと、たとえば目の前に大きな作品があると、その輪郭を手でたどりながら「まだある、まだある、どこまで続くのかな」と能動的に手を動かし、体を動かす「探索型の情報収集」になります。

見る鑑賞に比べて、触る鑑賞には時間がかかります。でも、ぱっと受動的に入ってくる視覚で得た情報は、すっとすぐに忘れがちです。それに対して、能動的な身体動作が伴う「触る鑑賞」の記憶はしっかりと長く残るんです。時間がかかるのはマイナスじゃない。丁寧に時間をかけることで、目に見えない世界をじっくり理解する楽しさや奥深さも絶対にあります。

「触覚」をはじめ、多様な感覚をもっと使えば、もっと豊かで楽しい！そんな気づきを示す存在に、自分がなれればいいなと思っています。

国立民族学博物館
2階「探究ひろば」（入館料無料ゾーン）に、触って鑑賞できる「世界をさわる」コーナーがある。
吹田市千里万博公園10-1
TEL 06-6876-2151・水休（祝日の場合は、翌日が休館）
入館料/一般580円